令和６年度学校経営計画に対する中間評価報告書

石川県立七尾高等学校

１　豊かな人間性と国際性の育成

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び今後の対応（改善策等）
・学校行事、生徒会活動や部活動等あらゆる活動を通して、多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦し、課題解決ができる力を育成する。	・一人ひとりがボランティアに関する意識を高め、校内だけにとどまらず、震災に係る復旧復興ボランティアなど校外に目を向け、これからの能登の創造的復興を担っていける人材を育成する。 ・各部・個人ボランティア活動 「校内」「地域貢献」 （随時）	【満足度指標】 （生徒） 校内や「復旧・復興ボランティア」をはじめとした地域貢献ボランティアを通して、「感謝・思いやり・協力」の心が育ったことを実感できる。	校内や「復旧・復興ボランティア」をはじめとした地域貢献ボランティアを通して、「感謝・思いやり・協力」の心が育ったことを「実感できる」・「やや実感できる」と答える生徒の割合の合計が Ａ　８５％以上 Ｂ　７５％以上 Ｃ　６５％以上 Ｄ　６５％未満	【７月実施学校評価アンケート】 〈生徒〉 77.7 ％ Ｂ	【評価方法】 ７、１２月実施の学校評価アンケートで評価する。 Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】 昨年度と比較して 6.1％上昇。震災の影響に伴い、学校として案内した活動だけでなく、個人的に地域の「復興・復旧ボランティア」などを行った経験が思いやりや感謝、協力の心を高めたと考える。 【今後の対応】 多くの方に感謝していただいた感謝の念を持たせながら、今後も「復旧・復興ボランティア」を継続する。
・異文化を理解しながら、ふるさとに愛着と誇りを持ち、グローカルな視点で社会に貢献する資質と態度を育成する。	・令和６年度地域の特色を活かしたふるさと教育推進事業（１、２年）	【満足度指標】 （生徒） ふるさとの良さを知り、ふるさとに対する誇りと愛着を実感できている。	４月に比べると、ふるさとの文化、産業、地域で活躍する人達を知り、ふるさとに誇りと愛着を「実感できた」・「やや実感できた」と答える生徒の割合の合計が Ａ　８０％以上 Ｂ　７５％以上 Ｃ　７０％以上 Ｄ　７０％未満	【７月実施学校評価アンケート】 〈生徒〉 81.０ ％ Ａ	【評価方法】 ７、１２月実施の学校評価アンケートで評価する。 Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】 各学年で昨年度より大幅に数字を伸ばしている。震災を経験して、ふるさとの状況に関心を持っている生徒が増えた。 【今後の対応】 2、3 年生において、能登の創造的復興について考える探究活動を行う計画であり、一層、地元への愛着をより高めていく。
	・異文化交流 ・留学希望生徒への支援	【満足度指標】 （生徒） 異文化について理解し、さらに学びたいという意欲が高まっている。	４月に比べると、異文化について理解し、さらに学びたいという意欲が「湧いた」・「やや湧いた」と答える生徒の割合の合計が Ａ　８０％以上 Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上 Ｄ　６０％未満		【評価方法】 １２月実施の学校評価アンケートで評価する。 Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。

学校関係者評価委員の評価	震災時、リーダーとなる存在の不足を感じた。プレゼンテーションなど発表の機会を設けて、発信力を身に付けさせてほしい。
評価結果を踏まえた今後の改善方策	探究活動などで、ファシリテーター育成などリーダー性の伸長を図っているが、あらゆる教育活動を通して、リーダー性の伸長を図っていく。

２　進路志望実現のための学力の形成

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
・基礎学力の定着を着実に進めるとともに、探究型学習を推進し、主体的に困難な課題と向き合い考え抜く力を育成する。 ・生徒の可能性を最大限に引き出し、多様な大学入試制度に対応できる進路指導を実践する。	・志を貫くためのキャリア教育 ・キャリア教育講演会 ・全国模試の校内採点による早期弱点指導の徹底 ・学習時間調査 ・ホーム担任、教科担当者、部顧問による個人面談 ・進路情報の発信 ・進路講演会 ・大学入試問題解法研究 ・習熟度別学習指導（週末課題） ・スーパー難関大学と難関大学別の講座や個別添削指導 ・金沢大学による出張講座 ・多様な入試制度に関する研修会 ・保護者への進路説明会 ・学習計画の作成とチェック ・志望校群別検討会（２年） ・志望校検討会（３年） ・出願校検討会（３年） ・志望理由書の作成（１、２年） ・批判的思考力育成 ・放課後学習会	【成果指標】 （生徒学年別） 第１志望に対して明確な理由がある。	高校卒業後について自分の言葉で語ることができると答えた生徒の割合が各学年目標に対して Ａ　１００％以上 Ｂ　８０％以上 Ｃ　８０％未満 各学年目標 １年１２０人（６割） ２年１４０人（７割） ３年１６０人（８割）	【７月実施学校評価アンケート】 ＜生徒：１年生＞ Ｂ ＜生徒：２年生＞ Ｂ ＜生徒：３年生＞ Ｂ	【評価方法】 ７、１２月実施の学校評価アンケートで評価する。 Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】 個人面談や授業・行事において生徒に語らせる活動を積極的に行っており、３学年とも概ね目標を達成している。 【今後の対応】 志望校や将来に対する希望を自分の言葉で表現できない生徒も一定数いることから、進路講演会等を通して「どう生きたいか」「どう在りたいか」を生徒自身に主体的に考えさせる。
		【成果指標】 （１年生生徒） 学習習慣を身につけ、学力を向上させている。	入学後、学力を伸ばした生徒が Ａ　１４０人以上 Ｂ　１２０人以上 Ｃ　１２０人未満		【評価方法】 ７月、１月の模試結果の比較で評価する。 Ｃの場合は改善策を検討する。
		【成果指標】 （１年生生徒） Ｓ難関・難関大学入学に堪えうる学力を獲得している。	１月進研模試での学力到達度（ＧＴＺ）のＳランクの生徒が Ａ　３０人以上 Ｂ　２０人以上 Ｃ　２０人未満		【評価方法】 １月の模試結果で評価する。 Ｃの場合は改善策を検討する。
		【成果指標】 （２年生生徒） 着実に学力を向上させている。	２年次に、学力を伸ばした生徒が Ａ　１６０人以上 Ｂ　１３０人以上 Ｃ　１３０人未満		【評価方法】 ７月、１月の模試結果で評価する。 Ｃの場合は改善策を検討する。
		【成果指標】 （２年生生徒） 着実に学力を向上させている。	１月進研模試３教科総合で学力到達度（ＧＴＺ）のＳランクの生徒が Ａ　３５人以上 Ｂ　２５人以上 Ｃ　２５人未満		【評価方法】 １月の模試結果で評価する。 Ｃの場合は改善策を検討する。

		【成果指標】 （３年生生徒） 生徒ひとりひとりが高い志望を持ち、進路実現を果たしている。	スーパー難関大学の合格者数が A　５人以上 B　３人以上 C　３人未満 難関 10 大学の合格者数が A　２０人以上 B　１５人以上 C　１５人未満 金沢大学の合格者数が A　３５人以上 B　２５人以上 C　２５人未満 国公立大学の合格者数が A　１４０人以上 B　１２０人以上 C　１２０人未満		【評価方法】 大学入試結果で評価する。 Ｃの場合は改善策を検討する。
学校関係者評価委員の評価		少子化により、一律な指導ではなく、学力層に応じた指導など工夫の余地があるように感じる。また核になる生徒の育成が大切。			
評価結果を踏まえた今後の改善方策		生徒の希望進路実現を最重視した指導を行っているところである。東大生と本校生徒の交流の場では、同級生や先輩にロールモデルとなる存在が効果的であるという話があった。そのような人材を育成できるよう努めていく。			

３　教員の総合的な指導力の育成

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
・「石川県教員育成指標」を踏まえ、教職に必要な素養、教科指導力、学級経営力、生徒指導力などの実践的な指導力の向上に努める。	・スマートフォン、携帯電話等によるインターネットトラブル（いじめを含む）に関する校内講習会の実施と、新しいトラブル対策のための資料の作成と配付 ・生徒会によるネットトラブル防止啓発活動の企画・実施	【成果指標】 （生徒） スマートフォン等によるインターネットトラブルに対する、安全・予防対策を実践している生徒の割合が高まっている。	スマートフォン等によるインターネットトラブルに対する安全・予防対策を、「十分に実践している」・「やや実践している」と答えた生徒の割合の合計が A　１００％ B　９０％以上 C　８５％以上 D　８５％未満	【７月実施学校評価アンケート】 ＜生徒＞ 92.5 ％ B	【評価方法】 ７、１２月実施の学校評価アンケートで評価する。 C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】 非行防止教室や生徒会執行部の働きかけなど啓発活動を行いスマートフォンの安全な利用については概ね目標を達成している。 【今後の対応】 今後も、学校生活の様々な場面において生徒にスマートフォンの安全な利用について生徒全員の対策実践を目指して考えさせる。
	・「生徒による授業評価」の結果に基づく授業改善の推進 ・予習・復習チェックの呼びかけ ・「予習・復習を促す効果的な指導」の研究 ・「探究」で培った指導法に関する研修及び情報共有	【成果指標】 （生徒） 国語・数学・英語において「予習や復習（振り返り）をして次の授業に臨んでいる」と答える生徒の割合が高まっている。	国語・数学・英語において「予習や復習（振り返り）をして次の授業に臨んでいる」に関して、「あてはまる」・「ややあてはまる」と答える生徒の割合の合計が A　９０％以上 B　８５％以上 C　８０％以上 D　８０％未満	【７月実施第１回生徒による授業評価】 84.4% C	【評価方法】 ７、１２月実施の学校評価アンケートで評価する。 C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】 前年度と比較して 2.8 ポイント減少。前年度と比較し、全学年家庭学習時間の増加が喫緊の課題である。 【今後の対応】 国語・数学・英語の重要性を強く伝えるとともに、予習・復習（振り返り）を前提とした授業を粘り強く実践する。
		【努力指標】 （教員） 探究の要素を取り入れた授業を実践している。	探究の要素を取り入れた授業を実践しているに関して「あてはまる」・「ややあてはまる」と答えた教員の割合が A　９０％以上 B　８０％以上 C　７０％以上 D　７０％未満	【７月実施学校評価アンケート】 ＜教員＞ 66.7% D	【評価方法】 ７、１２月実施の学校評価アンケートで評価する。 C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】 「探究の要素を取り入れた授業」について理解が浅い。 【今後の対応】 「探究の要素を取り入れた授業」について共通理解を深める。
・校内でのＯＪＴによる若手研修を、中堅・ベテラン教員の経験を活かしながら効果的に進め、教職員全体の指導力向上を図る。	「石川県教員研修計画」に基づいて、各課・学年・教科を主体としたＯＪＴによる若手教員育成を推進する。	【満足度指標】 （若手教員） ＯＪＴをとおして教員としての成長を実感できる。	ＯＪＴにより教員としての「知識・技能・指導力が向上している」・「やや向上している」と答えた若手教員の割合が、 A　９５％以上 B　９０％以上 C　８５％以上 D　８５％未満	【７月実施学校評価アンケート】 ＜教員＞ 86.2 ％ C	【評価方法】 ７、１２月実施の学校評価アンケートで評価する。 C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】 全教員が探究授業に関わり、そこで得た指導方法を日常的に活用しているが、それが質問内容に該当するとの認識が薄い。 【今後の対応】 若手教員早期育成プログラムの一環として若手教員に業務を与え、実践を通して知識・技能・指導力の向上を図る。

・GIGA スクール構想に基づいて１人１台端末を効果的に活用した授業を実践する力を身に付けることにより、生徒の学びの変容を促す。	情報課や ICT 支援員と協力し、学校を挙げて GIGA スクール構想を推進する。	【努力指標】 （教員） Chromebook を生徒に活用させながら、主体的で深い学びを目指した授業を実践している。	「Chromebook を生徒に活用させながら、主体的で深い学びを目指した授業を実践している」に、「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた教員の割合が、 Ａ　８０％以上 Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上 Ｄ　６０％未満	【７月実施学校評価アンケート】 ＜教員＞ 73.3 ％ Ｂ	【評価方法】 ７、１２月実施の学校評価アンケートで評価する。 Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】 Chromebook を活用した授業を実践する教員は着実に増加している。 【今後の対応】 今後も定期的に校内研修を実施し、各教科における効果的な Chromebook の活用例を教科横断的に展開していく。
学校関係者評価委員の評価	近隣の中学校では主幹教諭が定期的に若手教員を集めて短時間で無理なく研修等を行っているケースがある。話し方や伝え方の講座を行ってもよいのではないか。				
評価結果を踏まえた今後の改善方策	若プロ研修の参考にさせていただく。また、本校では全教科において指導主事を招聘して学び合う機会を設けている。今後も、互見授業など、教職員が互いに指導力を高め合っていく取り組みを進めていく。				

４　魅力ある学校づくり

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
・文理融合の視点で特色ある教育活動（ＳＳＨ・ＮＳＨ事業）を推進し、その成果を全国的に普及する。 さらに、小・中・高・大等と連携・交流を推進し、科学教育の水準向上を目指す。 ・能登の創造的復興を目指して、ひと・もの・こととつながり、社会問題を解決する力を育む。	学校設定教科「探究」の成果物等の他校への普及	【成果指標】 本校の開発した教材を提供し、県内外の他校（中学校を含む）に成果の普及を図っている。	本校の開発教材や報告書の閲覧件数（ダウンロード数）が，前年度に比べて増加数が Ａ　１０００件以上 Ｂ　５００件以上 Ｃ　２００件以上 Ｄ　２００件未満		【評価方法】 年度末の閲覧件数で評価する。 Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。
	物理チャレンジ、化学グランプリ、生物学オリンピック、数学オリンピック、全国総合文化祭等の全国規模の各種大会やコンテストへの出場者の育成	【成果指標】 （生徒） 全国大会相当への出場の決定数が増えている。	全国大会相当への出場が決定した個人またはグループ数が Ａ　４以上 Ｂ　３ Ｃ　２ Ｄ　１以下	【成果指標】 ＜生徒＞ ３件 Ｂ	【評価方法】 出場件数で評価する。 Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】 高校生バイオサミット決勝進出３件（優秀賞、審査員特別賞受賞、全国総文自然科学研究部門文化庁長官賞受賞） 件数のみならず、研究内容が高く評価され立派な賞を受賞した。 【今後の対応】 今後開催の数学オリンピック等に向け指導し、全国大会出場を目指す。
	英語に関するコンテスト（スピーチ、ディベート、エッセイ、暗唱、劇など）、弁論大会、その他課題研究コンテスト等への参加や応募の促進	【成果指標】 （生徒） 左記の大会やコンテストに参加し、実績を上げている。	左記大会やコンテストに参加し Ａ　入賞　４件以上 Ｂ　入賞　３件 Ｃ　入賞　２件 Ｄ　入賞　２件未満	【成果指標】 ＜生徒＞ ２件未満 Ｄ	【評価方法】 出場件数で評価する。 Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】 総文（６月）までの出場件数であり、今後の取組が期待される。 【今後の対応】 今後開催のビジネスプラングランプリ等に向け指導し、大会・コンテスト参加を目指す。
	CEFR Ｂ１以上の生徒の増加	【成果指標】 （生徒） ２年生のGTEC１２月受験で２CEFR Ｂ１以上の生徒が昨年と同水準の人数である。	CEFR Ｂ１以上の生徒が Ａ　６５人以上 Ｂ　５０人以上 Ｃ　４０人以上 Ｄ　４０人未満		【評価方法】 年度末の人数で評価する。 Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。

学校関係者評価委員の評価	生徒が安心して学校で過ごすことができている様子が伺われる。保護者としては学校を信頼している。一番の口コミとなるのは、在校生や中学生の母親であろう。女性に学校の魅力を発信してもらうのも一案だと思う。
評価結果を踏まえた今後の改善方策	中学生にとって本校の大きな魅力はその進路実績にある。更なる実績の積み重ねと併せ、中学生はもとより保護者にもその実績をアピールし、保護者の間で七高の魅力を高めていくことが大切である。女性・母親の視点は参考にさせていただく。

５　働き方改革の推進

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
・教職員は、ワークライフバランスやタイムマネジメントを意識しながら不断に業務改善を進めるとともに、「働きがい」を持って教育活動の質的向上に努める。	・情報共有をデジタル化することで、業務の効率化を図る。 ・研修を充実し教員の資質を高めることで、協業の体制をつくる。 ・学校経営計画に基づいた個々の目標を明確にすることで、達成感の共有を図る。	【成果指標】 観点１ 時間外勤務時間 観点２ ワークエンゲイジメント指標 （UWES）	観点１－① 時間外勤務時間の平均が Ａ　４０時間以内 Ｂ　４５時間以内 Ｃ　５０時間以内 Ｄ　５０時間を超える 観点１－② 時間外勤務時間の平均が８０時間を超える人数が Ａ　３人以下 Ｂ　５人以下 Ｃ　７人以下 Ｄ　８人以上 観点２ ワークエンゲイジメント指標（UWES）の平均が Ａ　４以上 Ｂ　３以上 Ｃ　２．６以上 Ｄ　２．６未満	【毎月実施勤務時間調査】 ＜教員＞ 観点１－① Ｄ 観点１－② Ｄ 【７月実施仕事に関する調査】 ＜教員＞ 観点２ Ｂ	【評価方法】 ７、１２月実施の学校評価アンケートで評価する。 Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 〈観点１〉 【分析】 定期人事異動等により校務分掌担当者が変わったことで不慣れな業務が増えた。 【今後の対応】 主任を中心に一年間の業務のねらいを把握し内容を精査することで課内における業務の平準化を図る。併せて校内における若手教員早期育成プログラムの充実を図り、若手教員の資質向上を推進する。 〈観点２〉 【分析】UWES の平均 4…世界的にみても高い平均値 3…日本における専門職の平均値 2.6…日本の平均値 においてＢ評価であり、概ね「満足度」が得られている。 【今後の対応】 校務分掌におけるねらいを成果指標等により明確化することで、業務に対する達成度を分かりやすくする。
学校関係者評価委員の評価	近隣の中学校では、部活動の時間を見直した。また震災対応に時間を要するため、年休を取りやすいように、休憩時間を分割する工夫を行っている。				
評価結果を踏まえた今後の改善方策	休憩時間の分割方式は参考になる。職員が働き甲斐をもてる業務の効率化と、生徒の学力向上を両立させるための工夫を図る。				